

福中都生子全詩集

1958~'76

福中都生子全詩集

1958-76

1967.5.31 ②

土曜美術社

福中都生子全詩集 1958~'76

著者 ● 福中都生子

装幀者 ● 加藤幾惠

発行者 ● 笛木利忠

発行所 ● 土曜美術社

東京都中央区新川二―二八―一 府研ビル
〒一〇四 電話〇三(三三四一)二八五九
振替 東京七・九九二九二

印刷 ● 日本美術印刷株式会社

発行 ● 一九七七年四月一〇日

定価 ● 三〇〇〇円

現住所 大阪市東住吉区田辺西七―四一

0092-0047-5330

目次

未刊詩篇

断崖の街	一二
香港の水	一四
一九七五年の防弾チョッキ	一六
遠い恋人私のアジエンデ	一八
ロンドンバリが走っている	二一
あさんたん	二四
胸ポケットの地図	二六
浪速男のプロポーズ	二八
東の窓からみえる山	三〇
されば私の御先祖さまは	三二
朝の茶の間	三四
ひとときの卵焼き	三八
ほんとうのことを言うために	四〇
近くて遠い人―金時鐘氏に―	四二
北の少年	四五
サバナ料理	四八
ゲリラということば	五〇

うわさのジョー・ヒル	五四
それでもやはり悲しいのは	五八
淡海幻想	

ことば	六五
木の芽どき	六六
菜の花漬け	六八
屹立する五月	七〇
二十歳になったお前	七二
父かとおもう 1	七五
父かとおもう 2	七六
父かとおもう 3	七七
琵琶湖	七九
鳥辺島のお胆	八二
いつかあえなく	八四
かるがも	八六
湖北だより	八八
生贄	九〇
疑問符の大地	九二

ちいさな旅人

夢の落武者	九四
石塔寺の女	九六
酒波寺に陽がおちて	九八
人は去り湖北はいま	一〇〇
雪の道	一〇二
雪女	一〇四
すすぎ	一〇六
ふるえながら	一〇八
風	一一二
スパシーボ	一一三
九月の花嫁	一一六
荒原の女性	一一八
ツェントラリナヤ・ホテルの窓	一二〇
アムール河のほとり	一二二
モスクワは大男	一二四
峠	一二六
トルストイの墓	一二八

やさしい恋うた

陽気なモスコビッチ	一三〇
ただ一人のレーニン	一三三
ペチェルスキー寺院のミイラたち	一三六
いたるところの行列	一三八
さらば、マヤコフスキー	一四〇
幽愁の街レニングラード	一四二
赤いちいさな林檎	一四四
ペーパー・パニック	一四六
ピョートルの海	一五〇
地底のうた・ひまわり	一五一
薔薇の呻き	一五四
やさしい恋うた	
酋長ジェロニモ	一五八
マロニエの五月	一六一
レモンのなみだ	一六四
風葬	一六六
やさしい恋うた	一六八
娘のころにねがったことば	一七〇

さみしい男Kに……………	一七二
ジャクリーンの涙……………	一七五
サバタのソンプレロ……………	一七八
シドニア公爵夫人……………	一八二
トンガの兵士……………	一八六
ガジュマルの樹の下……………	一九〇
キャプテン・ドレークの家……………	一九三
風の慟哭……………	一九六
ポプラの並木道……………	二〇〇
おなじではない……………	二〇二
スコット・マリーのウェスタン……………	二〇四
ジェシー・ジェームズが死んだのは……………	二〇七
さようならのことばについて……………	二一〇
愛はそよ風よりも……………	二一二
おくれてきたジプシー……………	二一四

初期詩篇

1 灰色の壁に

寒い日……………	二一八
----------	-----

ナフタリン	二一九
岐路にたつ日	二二〇
白がすり	二二一
白い水晶	二二二
空の井戸	二二三
キューバ糖	二二四
白い砂丘	二二五
まぼろし	二二六
小柄な人	二二八
食うか食われるか	二三〇
女の時間	二三二
慢性恐慌	二三四
ある日の祭典	二三六
Ⅱ 雲の劇場	
雲の足	二四〇
いちにち	二四一
なげつきたい	二四三
たつまぎの家	二四六

五月の女……………二四八

あたしは糊……………二四九

優等生たち……………二五〇

亀裂……………二五三

火の塔……………二五四

エプロンをかけた鳩……………二五六

わたしの失恋……………二五八

小石のプレゼント……………二六一

■
南大阪

南大阪 I……………二六八

南大阪 II……………二七一

約束した人……………二七三

心斎橋……………二七六

おまえが生まれた日……………二七八

産んできた殺してきた……………二八〇

だきあってねむる夜のように……………二八二

死児の街……………二八四

まがりかど……………二八七

IV

十年目……………	二八八
まだ持っているちいさな荷物……………	二九〇
ぼくのパパはマドロスさん……………	二九二
海がゆっくりかたむく時……………	二九四
黒潮はながれている……………	二九七
女ざかり……………	
薔薇と蛇と……………	三〇〇
夜明けまえの街……………	三〇一
ねそべっていたジャン・ダーク……………	三〇二
わたしのころがふるえる時……………	三〇四
ひるがお……………	三〇七
月が瀬……………	三〇八
はやすぎた開花……………	三一〇
生駒山……………	三一二
口笛……………	三一三
とおりすぎてゆく女……………	三一四
まるはだかのちいさな鬼……………	三一六
アマゾンの女たち……………	三一八

女ざかり	三二〇
------	-----

解説	井上俊夫	三二三
あとがきに変えての略年譜		三三〇

未
刊
詩
篇

断崖の街

うしろは海

つまさきで立っている背骨の海

眼前には とほうもない大陸と空

前へ前へと 歩いてゆけば

死ぬまで 歩いてゆけるかもしれないのに

どうしてなのか

この街の人たちは

うしろへうしろへと

あとずさりしながら生きてきたようにみえる

もう一歩だってふりむくことはできない

ふりむいたりしようものなら

自分の首の重みで

そのまま まっさかさまに

落ちるほかない大地のどんづまり

目の前の崖をくだき

それを足もとに引きのばし

つんのめるように海壁にひしめきあって

どこまで あとずさりをしてゆくのだろう

白い骨の墓地のような

どんづまりの街

ゆきずりの街 ホンコンの

すこしにごった海からは

飢えた屍臭のにおいがした

とおくに クイーン・エリザベス号が

赤錆びた左舷を断末魔の祈りのように

くもった空につきたてている

ホンコン・マカオの旅から

『ばしりすこ』3号 74・1月

香港の水

バスガイドのTさんは

青い木綿のスーツを着て

かかとのひくい靴を履いていた

化粧あとのない素顔は日本の戦争中の

女学生のように

ながい睫の下ではいつも何かにおびえているような

茶色の瞳がまたたいていた

日本で二年間まなんだという彼女の日本語は

透明な原語のように明瞭だった

△ホンコン政府は中国から一ガロン一ドルで毎日本を

買っています。それを一ガロン三ドルでわたしたちに

売ってくれます。これが本当の水商売です▽

バスの中の日本人はどつと笑った

わたしは貧民街の出身ですから

学校にはゆけませんでしたと笑いながら

香港はお金持の子供がゆく学校しかありません

だから この町にどんな詩人がいるかわかりません

わたしの質問にこたえ